

共働き世帯と非共働き世帯の夫妻の ワーク時間の時系列変化

— 家族類型からみた分析 —

平 田 道 憲

(2007年10月4日受理)

The Change of Time Spent on Unpaid Work and Paid Work by Dual-income Couples
and Non Dual-income Couples

— The analyses from the viewpoint of family type of household —

Michinori Hirata

Abstract. This paper examines the change of time spent on unpaid work and paid work by dual-income couples and non dual-income couples. Analyses in this paper are based on data of 1991, 1996 and 2001 Survey on Time Use and Leisure Activities conducted by Statistics Bureau, Ministry of Public Management, Home Affairs, Posts and Telecommunications, Japan. Unpaid work includes cooking, cleaning, laundry, caring for adults, household chore, child care, shopping and voluntary work. The change or immutability was analyzed mainly from the viewpoint of family type of household. Time devoted to paid work of husbands has decreased and time devoted to unpaid work of them has increased in this decade. However, compared with reduction of paid work, increment of unpaid work was small. It has not changed that time spent on unpaid work by husbands in non dual-income family is longer than that by husbands in dual-income family. Though the effect of living with parents of couple is not consistent in case of wives in dual-income family, it is consistent in case of wives in non dual-income family. Time devoted to unpaid work by wives, living with parents in non dual-income family is consistently longer than wives, not living with parents in this decade.

Key words: time use, dual-income, husband and wife, unpaid work, time series

キーワード：生活時間，共働き，夫妻，アンペイドワーク，時系列

1. はじめに

生活時間研究は、まず個人の時間の使い方に着目して研究が進められた。しかしながら、その後、世帯を単位とした生活時間研究の重要性も認識されるようになり、とくに、家政学のなかの家庭経営学分野においては、世帯を単位とした生活時間研究の蓄積がある。

そうした研究のなかでは、夫妻の生活時間に焦点をあてた研究が多く、とくに夫妻の職業労働従事に関し

て、共働きか否かに注目した研究がいくつかある[伊藤・天野, 1989, 天野・伊藤ほか, 1994, 大竹, 1997, 貴志・上原・平田, 2006]。これらの研究成果によって、共働き世帯と非共働き世帯における夫妻の生活時間の特徴が明らかになっているものの、各研究の調査実施時期、調査地域、調査対象などに違いがあるため、結果の厳密な意味での比較に困難な面がある。したがって、調査実施時期の違いから生活時間の変化あるいは不易を分析することもむずかしい。

個々の研究で明らかになった共働き世帯と非共働き世帯の夫妻の生活時間の特徴は、どの程度普遍性をもつのであろうか。そうした特徴は時代の推移によって変化しているものであろうか、あるいは変化せず一貫した傾向となっているものであろうか。これまでの研究成果の蓄積をより有用なものにするためには、このような疑問に答える必要がある。

さいわい、日本では、総務省統計局によって、全国規模の生活時間調査である社会生活基本調査が5年ごとに実施されている。本論文の目的は、この社会生活基本調査の1991年、1996年、2001年の3回の調査結果を用いることによって、共働き世帯と非共働き世帯の夫妻のワーク時間の10年間の時系列変化を明らかにすることである。ワーク時間とは、アンペイドワーク時間およびペイドワーク時間を意味している。家族類型による比較を中心に、共働き世帯と非共働き世帯の夫妻のワーク時間の時間量、および属性による相違の傾向の変化あるいは不易を追究した。

2. 研究の方法

(1) 使用したデータ

本論文で使用したデータは、総務省統計局（旧総務庁統計局）が1991年、1996年、2001年に実施した3回の社会生活基本調査の調査結果である〔総務庁統計局、1993、総務庁統計局、1998、総務省統計局、2003〕。

社会生活基本調査は、国民の生活時間の配分および自由時間等における主な活動について調査し、国民の社会生活の実態を明らかにすることにより、各種行政施策の基礎資料を得ることを目的としている。

1976年の第1回調査以来5年ごとに実施され、1991年、1996年、2001年の3回の調査は、第4回目から第6回目にあたっている。

調査対象は世帯に属する10歳以上（1991年調査は15歳以上）の世帯員であり、二段階確率比例抽出法により、約73,000世帯～99,000世帯を抽出して調査し、約19万人～27万人の回答を得ている。現在のところ、世界最大規模の生活時間の全国調査である。

(2) 分析の枠組み

本論文では、共働き世帯と非共働き世帯の夫妻のアンペイドワーク時間とペイドワーク時間を、家族類型別に分析した。本論文で用いるデータは、同一世帯の夫と妻のデータである。

アンペイドワークは日本語では無償労働という訳語があてられている。日本においてアンペイドワークが注目されるようになった背景については以前の論文で

述べた〔平田、2005〕。

本論文におけるアンペイドワークは、社会生活基本調査の次の5つの行動を含めている。

- 1) 家事（炊事、掃除、洗濯、裁縫・編物、家庭雑事）
- 2) 介護・看護
- 3) 育児
- 4) 買い物
- 5) ボランティア活動・社会参加活動（ボランティア、献血、婦人活動、消費者活動、住民運動など）

したがって、本論文で集計されるアンペイドワークは、従来の家事労働にボランティア活動・社会参加活動を加えたものと考えてよい。

本論文のペイドワークは、社会生活基本調査の分類では「仕事」時間を意味している。

共働き世帯とは、夫も妻も有業の世帯である。この共働き世帯には夫あるいは妻が雇用されていない有業の世帯も含まれる。共働き世帯のなかで夫も妻も雇用されている世帯を抽出し、妻の週間就業時間によって35時間未満か以上かによる分類も使用した。本論文における非共働き世帯とは、夫有業妻無業の世帯である。したがって、夫が無業の世帯は本論文では分析の対象としていない。

世帯の家族類型は次の4類型とした。

- 1) 夫婦のみ
- 2) 夫婦と両親
- 3) 夫婦と子ども
- 4) 夫婦と子どもと両親

なお、この家族類型での夫婦とは、世帯内でもっとも若い世代の夫婦のことをいう。したがって、共働きか否かについてもこの夫婦について分類したものである。

本論文で使用する時間量データは週全体平均である。週全体平均は次式により曜日別結果を加重平均したものである。

$$\text{週全体平均} = (\text{平日平均} \times 5 + \text{土曜日平均} + \text{日曜日平均}) \div 7$$

分析の枠組みとしては、共働き世帯と非共働き世帯の夫と妻について、家族類型による比較を中心に、第一にワーク時間の時間量が10年間でどう変わったかあるいは変わらなかったか、第二に、属性による相違の傾向が10年間でどう変わったかあるいは変わらなかったかを検討することにした。

3. 夫のワーク時間の変化

(1) 共働き世帯と非共働き世帯の夫のワーク時間の変化

図1は、共働き世帯と非共働き世帯の夫のアンペイドワーク時間とペイドワーク時間の変化を示したもの

である。左半分が共働き、右半分が非共働きである。それぞれ、1991年から1996年の5年間、1996年から2001年の5年間、1991年から2001年の10年間の変化を表している。グラフの下には、実際の時間量の変化の数値が示されている。

この10年間に、夫のペイドワーク時間は減少し、アンペイドワーク時間は増加した。とくに、共働きの夫のペイドワーク時間の減少が大きい。しかしながら、共働きにせよ、非共働きにせよ、ペイドワーク時間の減少分に比べると、アンペイドワーク時間の増加分は少ない。10年間の変化でみた場合、共働きの夫はペイドワーク時間が28分減少したのに対して、アンペイドワーク時間の増加分は6分、非共働きの夫はペイドワーク時間の12分の減少に対して、アンペイドワーク時間の増加分は8分である。

ペイドワーク時間の減少は共働きの夫のほうが大きくなっているのに対して、アンペイドワーク時間の増加は両者でほとんど違いがない。

(2) 共働き世帯と非共働き世帯の夫のアンペイドワーク時間

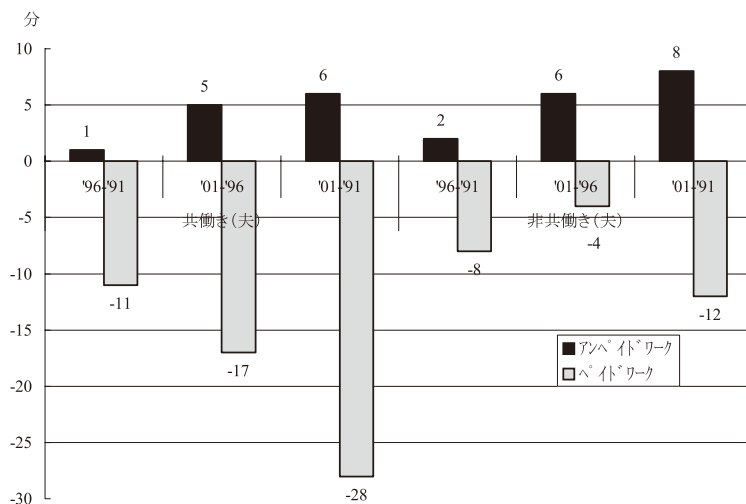
表1は、夫も妻も雇用されている共働き世帯における夫のアンペイドワーク時間を妻の週間就業時間が35時間未満か以上かによって比較したものである。

仮説的には、妻の週間就業時間の長い夫のほうがアンペイドワーク時間が長いと推測される。表1によると、この傾向はすべての家族類型においてみられ、この10年間で変化していない。

共働き世帯の夫妻の生活時間研究で不思議なことと考えられている結果の一つが、共働き世帯の夫よりも非共働き世帯の夫のアンペイドワーク時間が長いということである〔平田、1998、貴志・上原・平田、2006〕。共働き世帯の夫は妻が職業労働に従事しているのだから非共働き世帯の夫よりアンペイドワーク時間が長いであろうという予想をくつがえす結果だからである。

表2はその結果を示したものである。夫合計（家族類型全体）および各家族類型のなかのそれぞれ3行ずつのデータのうち、一番上が共働き全体、一番下が非共働き全体である。真ん中の行は、表1で分析した妻の週間就業時間が35時間以上の夫のデータである。

家族類型に分けない夫合計でも、家族類型別にみても共働き全体の夫のアンペイドワーク時間が最短であり、この傾向は10年間で変化していない。両親と同居している場合は、共働きでも両親、主として母親のアンペイドワークが期待されるため共働きの夫のアンペイドワーク時間が長くないという仮説が成り立つ可能性もあるものの、表2によれば、核家族であっても共働きの夫のアンペイドワーク時間のほうが短くなっ



	共働き (夫)			非共働き (夫)		
	'96-'91	'01-'96	'01-'91	'96-'91	'01-'96	'01-'91
アンペイドワーク (分)	26-25	31-26	31-25	30-28	36-30	36-28
ペイドワーク (分)	438-449	421-438	421-449	415-423	411-415	411-423

図1 共働き世帯と非共働き世帯の夫のワーク時間の変化（週全体）

ている。

妻の週間就業時間が35時間以上の夫のデータを加えると、夫合計（家族類型全体）では、このグループの夫のアンペイドワーク時間が最長である。しかしながら、家族類型別にみると、妻の週間就業時間が35時間以上の夫と非共働き世帯の夫のどちらのアンペイドワーク時間が長いかについては家族類型、時系列でみた場合、安定した傾向は見出せない。

妻の週間就業時間が35時間以上ということは、その多くは妻がフルタイムの世帯であると推測できる。調

表1 共働き世帯における夫のアンペイドワーク時間（週全体）（妻の週間就業時間別・夫も妻も雇用されている世帯）

（単位：分）

	1991	1996	2001
夫合計（家族類型全体）			
妻が35時間未満	23	22	29
妻が35時間以上	29	30	38
夫婦のみの世帯			
妻が35時間未満	22	20	27
妻が35時間以上	27	27	31
夫婦と両親の世帯			
妻が35時間未満	20	14	14
妻が35時間以上	22	23	24
夫婦と子どもの世帯			
妻が35時間未満	23	23	26
妻が35時間以上	28	31	42
夫婦、子どもと両親の世帯			
妻が35時間未満	21	26	36
妻が35時間以上	33	30	36

表2 共働き世帯と非共働き世帯の夫のアンペイドワーク時間（週全体）

（単位：分）

	1991	1996	2001
夫合計（家族類型全体）			
夫が有業で妻も有業（共働き）	25	26	31
妻が35時間以上	29	30	38
夫が有業で妻が無業（非共働き）	28	30	36
夫婦のみの世帯			
夫が有業で妻も有業（共働き）	26	26	30
妻が35時間以上	27	27	31
夫が有業で妻が無業（非共働き）	27	27	34
夫婦と両親の世帯			
夫が有業で妻も有業（共働き）	22	21	24
妻が35時間以上	22	23	24
夫が有業で妻が無業（非共働き）	24	26	30
夫婦と子どもの世帯			
夫が有業で妻も有業（共働き）	24	24	32
妻が35時間以上	28	31	42
夫が有業で妻が無業（非共働き）	29	30	38
夫婦、子どもと両親の世帯			
夫が有業で妻も有業（共働き）	26	29	32
妻が35時間以上	33	30	36
夫が有業で妻が無業（非共働き）	32	34	37

査時期や家族類型によっては、妻がフルタイムの世帯の夫のアンペイドワーク時間が非共働き世帯の夫のアンペイドワーク時間より短いということは、日本の夫妻の共働きを理解するうえで、まだ理由が解明されていない生活時間の特徴の一つである。

（3）共働き世帯と非共働き世帯の夫のペイドワーク時間

なぜ共働き世帯全体の夫のアンペイドワーク時間が非共働き世帯の夫のアンペイドワーク時間より短いのか。その鍵をにぎる要因の一つがペイドワーク時間である。表3は、共働き世帯全体と非共働き世帯の夫のペイドワーク時間を示したものである。

91年と96年のデータを見るかぎり、家族類型に分けない合計でみても、家族類型別にみても、共働き世帯の夫のペイドワーク時間が非共働き世帯の夫のペイドワーク時間より長いことがわかる。

この結果は、共働きは稼ぎ手が二人なのだからペイドワーク時間を少なくしようというワークシェアリングの発想からは遠いものである。しかしながら、共働き世帯の夫のペイドワーク時間が非共働き世帯の夫より長いことは、共働き世帯の夫のアンペイドワーク時間が非共働き世帯の夫より短いことを説明する一つの要因にはなっている。

ただし、2001年のデータを見ると、この傾向が必ずしも継続的でないことがわかる。2001年の調査結果において、子どものいる世帯（夫婦と子どもの世帯、夫婦、子どもと両親の世帯）では、非共働き世帯の夫のほうがペイドワーク時間が長くなっている。時間量の差は必ずしも大きくないので、今後のデータを継続的に確認していく必要はあるが、これまでの傾向の変化

表3 共働き世帯と非共働き世帯の夫のペイドワーク時間（週全体）

（単位：時間、分）

	1991	1996	2001
夫合計（家族類型全体）			
夫が有業で妻も有業（共働き）	7.29	7.18	7.01
夫が有業で妻が無業（非共働き）	7.03	6.55	6.51
夫婦のみの世帯			
夫が有業で妻も有業（共働き）	6.58	6.50	6.29
夫が有業で妻が無業（非共働き）	6.23	6.01	5.46
夫婦と両親の世帯			
夫が有業で妻も有業（共働き）	7.45	7.35	7.03
夫が有業で妻が無業（非共働き）	7.45	7.20	6.17
夫婦と子どもの世帯			
夫が有業で妻も有業（共働き）	7.36	7.26	7.13
夫が有業で妻が無業（非共働き）	7.14	7.12	7.14
夫婦、子どもと両親の世帯			
夫が有業で妻も有業（共働き）	7.49	7.41	7.26
夫が有業で妻が無業（非共働き）	7.26	7.27	7.31

の兆候を示唆している可能性はある。

このデータの示すことは、共働き世帯の夫が非共働き世帯の夫よりペイドワーク時間が短いにもかかわらず、アンペイドワーク時間も短いということである。共働き世帯の夫がアンペイドワークに従事しないことの要因を、ペイドワーク時間の長さ以外に求めていく必要があることを示唆している。

4. 子どもの有無・両親との同居の影響の変化

ここでは、家族類型に焦点をあて、子どもの有無と両親との同居が夫と妻のアンペイドワーク時間に与える影響とその時系列変化を分析する。

(1) 子どもの有無による夫妻のアンペイドワーク時間

表4は、核家族か両親と同居しているかでコントロールして、子どもの有無による妻と夫のアンペイドワーク時間を示したものである。

核家族の場合、「夫婦のみ」世帯と「夫婦と子ども」世帯を比較すると、妻の場合は、子どものいる世帯のほうがアンペイドワーク時間が長い。この傾向は、10年間で変化していない。子どものいない世帯と子どものいる世帯のアンペイドワーク時間の差は、共働きの場合は1時間20分前後、非共働きの場合は2時間から2時間半弱である。

夫の場合は、時間量そのものが短いので大きな差ではないものの、非共働き世帯では子どものいる世帯のほうがアンペイドワーク時間が長い、共働き世帯の91年、96年は子どものいない「夫婦のみ」の世帯のほうがアンペイドワーク時間が長くなっている。2001年

調査では子どものいる世帯のほうがアンペイドワーク時間が長い。

両親と同居している家族類型の場合は、夫、妻ともに、3回の調査すべてで子どものいる世帯のアンペイドワーク時間が長くなっている。両親と同居している場合は、子どものいる世帯と子どものいない世帯のアンペイドワーク時間の差は、妻だけでなく、夫においてもかなりの大きさを示している。

(2) 両親との同居による夫妻のアンペイドワーク時間

表5は、子どもの有無でコントロールして、妻と夫のアンペイドワーク時間に与える両親との同居の影響を示したものである。

子どものいない世帯の場合、妻は1時点の例外(1996年・共働き)を除き、両親と同居しているほうがアンペイドワーク時間が長くなっている。両親と同居することによって、主として母親の分担により妻のアンペイドワーク時間が短くなるということはない。夫は、共働きか非共働きかには関係なく、両親と同居していないほうがアンペイドワーク時間が長くなっている。

子どものいる世帯の場合、妻のアンペイドワーク時間は、共働き世帯では一貫して両親と同居しているほうが短くなっている。子どもがいる共働き世帯の場合は、両親との同居によって、主として母親の分担により、妻のアンペイドワークの負担が減少しているといえる。しかしながら、非共働き世帯の場合は、逆に、両親と同居しているほうが一貫してアンペイドワーク時間が長くなっている。

子どものいる世帯の夫の場合、96年までは両親と同居しているほうがアンペイドワーク時間が長い。この結果は、子どものいない世帯の場合と逆になってい

表4 子どもの有無による妻と夫のアンペイドワーク時間（週全体）

（単位：時間、分）

	妻			夫		
	1991	1996	2001	1991	1996	2001
核家族						
夫婦のみの世帯						
夫が有業で妻も有業（共働き）	3.21	3.18	3.22	0.26	0.26	0.30
夫が有業で妻が無業（非共働き）	5.59	5.34	5.18	0.27	0.27	0.34
夫婦と子どもの世帯						
夫が有業で妻も有業（共働き）	4.44	4.37	4.42	0.24	0.24	0.32
夫が有業で妻が無業（非共働き）	7.50	7.37	7.42	0.29	0.30	0.38
両親と同居						
夫婦と両親の世帯						
夫が有業で妻も有業（共働き）	3.25	2.52	3.27	0.22	0.21	0.24
夫が有業で妻が無業（非共働き）	6.48	6.11	6.07	0.24	0.26	0.30
夫婦、子どもと両親の世帯						
夫が有業で妻も有業（共働き）	4.39	4.26	4.28	0.26	0.29	0.32
夫が有業で妻が無業（非共働き）	8.52	8.35	8.23	0.32	0.34	0.37

表5 両親との同居による妻と夫のアンペイドワーク時間（週全体）

（単位：時間、分）

	妻			夫		
	1991	1996	2001	1991	1996	2001
子どものいない世帯						
夫婦のみの世帯						
夫が有業で妻も有業（共働き）	3.21	3.18	3.22	0.26	0.26	0.30
夫が有業で妻が無業（非共働き）	5.59	5.34	5.18	0.27	0.27	0.34
夫婦と両親の世帯						
夫が有業で妻も有業（共働き）	3.25	2.52	3.27	0.22	0.21	0.24
夫が有業で妻が無業（非共働き）	6.48	6.11	6.07	0.24	0.26	0.30
子どものいる世帯						
夫婦と子どもの世帯						
夫が有業で妻も有業（共働き）	4.44	4.37	4.42	0.24	0.24	0.32
夫が有業で妻が無業（非共働き）	7.50	7.37	7.42	0.29	0.30	0.38
夫婦、子どもと両親の世帯						
夫が有業で妻も有業（共働き）	4.39	4.26	4.28	0.26	0.29	0.32
夫が有業で妻が無業（非共働き）	8.52	8.35	8.23	0.32	0.34	0.37

る。しかしながら、2001年にはこの傾向がみられず、両親との同居の影響がほとんどなくなっている。

5. おわりに

共働き世帯と非共働き世帯の夫妻の生活時間に関するこれまでの研究成果が時代によって変化しているのかいないのかを確認するために、社会生活基本調査の3回の調査結果を用いた時系列分析を実施した。

夫についてみたとき、ペイドワーク時間の減少がアンペイドワーク時間の増加には結びついていない。

共働き世帯において、妻の週間就業時間が長いほど夫のアンペイドワーク時間が長いという傾向、非共働き世帯の夫のアンペイドワーク時間が共働き世帯の夫のアンペイドワーク時間（共働き全体平均）より長いという傾向は不変である。

妻のアンペイドワーク時間が子どものいる家族類型で長いという傾向、非共働き世帯の妻のアンペイドワーク時間が両親と同居している家族類型で長いという傾向も不変であった。

一方で、共働き世帯の夫のペイドワーク時間（共働き全体平均）が非共働き世帯の夫のペイドワーク時間より長いという傾向は、一部の家族類型ではみられなくなっている。

一般に生活時間配分は、属性レベルでみた場合、短期間ではそれほど大きく変化しないといわれている。社会生活基本調査の調査結果を使用することによって、5年、10年、20年といったタイムスパンでの生活時間の変化を追跡することができる。本論文は10年間の変化を追跡したものであるが、もう少し長期間のスパ

ンペイドワーク時間の増加には結びついていない。

本論文は科学研究費補助金（基盤研究（C）, 平成18年度～20年度, 「共働き世帯と非共働き世帯の夫妻のタイムプレッシャ」, 研究代表者：平田道憲）によって実施した研究成果の一部である。

【参考文献】

- 天野寛子・伊藤セツ・森ます美・堀内かおる・天野晴子, 『生活時間と生活文化』, 光生館, 1994年
- 平田道憲, 「生活時間からみた男女共生社会の展望」, 岡本祐子・平田道憲・岩重博文編著, 『人間生活学』, 北大路書房, 1998年
- 平田道憲, 家族成員のアンペイドワーク時間, 『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』, 第53号, 2005年, pp.385-391
- 伊藤セツ・天野寛子共編著, 『生活時間と生活様式』, 光生館, 1989年
- 貴志倫子・上原智子・平田道憲, 雇用者夫妻のペイドワーク時間とアンペイドワーク時間ーワーク時間階級別にみた夫妻相互の生活時間ー, 『日本家政学会誌』, 第57巻, 第1号, 2006年, pp.3-12
- 大竹美登利, 『大都市雇用労働者夫妻の生活時間にみる男女平等』, 近代文芸社, 1997年
- 総務庁統計局, 『平成3年社会生活基本調査報告』日本統計協会, 1993年
- 総務庁統計局, 『平成8年社会生活基本調査報告』日本統計協会, 1998年
- 総務省統計局, 『平成13年社会生活基本調査報告』日本統計協会, 2003年